可児市埋文調査報告28

# 広見　中川寺１号墳・中世墓群

## 「歴史と文化の森」公園造成に伴う
## 埋蔵文化財の発掘調査報告書

1998

岐阜県　可児市教育委員会

# はじめに

古墳時代の可児市は、美濃の中でも拠点的な場所であり、政治的、文化的にも重要な部分を担っていたであろうことが、前波古墳群の存在や多くの発掘調査の結果から明らかにされています。

このたび、著名な身隠山古墳群を含む丘陵地に、「歴史と文化の森」と称する自然公園が計画され、存在の知られていなかった１基の古墳等が、工事中に発見されました。

市教委は、直ちに緊急調査を実施いたしましたが、遺跡の保存状態は悪く、やむなく記録保存の措置を図りました。

この調査におきましては、古墳時代後期初頭という、当地域における群集墳形式の初期段階の古墳の様子が明らかにできました。ここにその成果をご報告申し上げます。ご活用願えれば幸いに存じます。

末筆ながら、本調査に当り、ご理解とご支援を賜りました地権者の方や工事関係者の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

平成10年12月

可児市教育委員会

教育長　渡辺　春光

# 例　言

1．本報告書は、岐阜県可児市広見字中川１０３５番地の３に所在した、広見中川寺１号墳と同中川寺中世墓群の緊急発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、「歴史と文化の森」公園造成事業に伴うもので、事業主体者である可児市が費用を負担し、可児市教育委員会が調査主体として実施した。

3．発掘調査の体制は次のとおりである。

教　育　長　　渡辺　春光

教育部長　　宮島　凱良

社教課長　　奥村　晴保

同補佐(文化係長)　亀谷　泰隆

調査担当　　吉田　正人

作業員の皆さん

伊佐治　誠　　岩名　孝代　　可児　英治

北西　幸彦　　香田　公夫　　成尾　孝子

水野　テツ子

4．本書の編集と執筆は、長瀬治義が担当した。遺物の実測、トレース、写真も同様である。

5．発掘調査の図面、遺物は、可児市教育委員会(可児郷土歴史館)が保管する。

6．方位は真北である。

# 目　次


Ⅰ．発掘調査の経過 …… 1

Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2

Ⅲ．中川寺１号墳 …… 6

Ⅳ．中川寺中世墓群 …… 12

Ⅴ．まとめ …… 17

○　写真図版 …… 19


挿図一覧


第１図　立地と環境 …… 3

第２図　現況測量図 …… 5

第３図　石室実測図 …… 7

第４図　副葬遺物出土状況 …… 8

第５図　墳丘断面図 …… 9

第６図　中世墓群実測図 …… 14

第７図　中川寺１号墳遺物 …… 15

第８図　中川寺１号墳・中世墓群遺物 …… 16

第９～12図　須恵器の法量分布 …… 18


表一覧


第１表　広見古墳群出土遺物の整理 …… 4

第２表　中川寺１号墳遺物観察表 …… 11

第３表　中川寺中世墓群遺物集計表 …… 13

第４表　中川寺中世墓群遺物観察表 …… 13

# Ⅰ．発掘調査の経過

## (1) 調査に至る経緯

以前より進められてきた、可児市「歴史と文化の森」の公園整備事業は、平成９年度においてレクリエーション・ゾーンの整備工事に着手した。市教委では、当工事区域内に埋蔵文化財は確認していなかったが、工期半ばの８月４日になって、中川寺裏の丘陵尾根の一部を重機で削平中、古墳の石組らしき石材の一部と須恵器の出土を確認した旨、地権者である中川寺御住職より知らせが入った。

市教委は、担当部局の都市計画課と保存について協議をするとともに、工事の一時中断を依頼した。現地踏査における所見では、古墳の石室自体が比較的小規模らしく、かつ発見時点においての保存状況は不良であること。古墳のすぐ下方にも中世墓らしい集石が散見されること、が認められた。また、発見自体が不慮のことであり、公園という趣旨の中での利用価値は高いものの、その立地と進行中である工事計画の面から、現状保存は不可能であるとの結論に達した。

ここにおいて、関係手続きを行なうとともに、記録保存としての緊急発掘調査を実施するに至った。

・文化財保護法第57条の６第１項の手続き

市教委発　平成９年８月５日付　可教社第２３２号　（遺跡発見の届出）　県教委宛

県教委発　平成９年８月14日付　教文第２６２号の４（遺跡発見の通知）　市教委宛

・文化財保護法第98条の２第１項の手続き

市教委発　平成９年８月11日付　可教社第２３６号　（発掘調査の報告）　県教委宛

## (2) 調査の経過

発掘調査の現場作業は、平成９年８月11日から８月22日までの間、実質８日間行い、その後整理作業を断続的に実施した。

古墳は尾根の最高所で発見されたが、既に重機が稼働して削平を始めた状況であり、石室の一部と考えられる石材の散乱と、副葬遺物の一部と見られる須恵器６個体以上の出土が確認された。しかし、天井石と考えられるような大きな石材は見当らず、また散乱する石材の数もさほど多くなく、かつ副葬遺物面にまで到している状況を合わせ考えると、削平以前においても古墳の遺存状況はあまり良くなかったことが推測できる。

調査は全て人力で行い、撹乱土を除去して石室と墳丘の遺存状況を把握するとともに、古墳の下方に散見された川原石の集石についても合わせて行った。発見の経緯が経緯だけに、かなりの情報が失われていたが、それでもこの地域における群集墳形成の初期段階の古墳の様子の一端が明らかにできたことは、大きな成果と言えよう。現場図面は、$\frac{1}{20}$を基本として実測している。

・発掘調査終了の手続き

市教委発　平成９年９月８日付　可教社第２８７号　（調査終了の報告）　県教委宛

・文化財保護法第65条、遺失物法第１条第１項の手続き

市教委発　平成９年９月５日付　可教社第２８５号　（埋蔵文化財保管証）　県教委宛

市教委発　平成９年９月５日付　可教社第２８４号　（埋蔵物発見届）　可児警察署宛

# II．遺跡の立地と環境

## (1) 自然的・歴史的環境

可児市は岐阜県の南部に位置し、その北辺を大河木曽川が蛇行する。当地は、基盤の美濃堆中古生層が陥没してできた可児・美濃加茂盆地の南部に当り、市域の各所で特徴ある地層の堆積状況を呈している。東・西辺部はチャートを主体とする中古生層が露頭し、標高300mを越える丘陵の最高所を形成している。南部一帯は、第三紀鮮新世の古木曽川の氾濫による堆積物である土岐砂礫層が覆う。この地層には団塊状に白色粘土が含まれ、平安期以降の美濃窯の大発展を促す必要条件となり、その窯稼動の舞台となる。標高110～180m付近に露頭する第三紀中新世の平牧層は、基盤陥没後にできた可児湖の堆積物で主に凝灰質砂岩から成り、土岐砂礫層の下位にあるが、中村層（帷子累層）とも合わせて、古墳時代後期全般に可児川の支流、久々利川水系で100基を超える横穴墓造営の舞台となった。[1] 尚、木曽川流域に分布する家形石棺の一部は、この地層が石材として切り出され、横穴墓造営集団や川原石積石室墳造営集団と密接に関係を保ちつつ供給されている。[2] 市北部一帯の平坦地は、主に第四紀に属する木曽川の段丘堆積物から成り、木曽川に沿って低・中・高位の三段が認められる。

古墳時代前半期の集落は、川合宮之脇遺跡（低位）や徳野遺跡（中位）、欠ノ上遺跡（中位）等、各所で見受けられるが、古墳の造営は、中位段丘面の前波古墳群（西寺山、野中、長塚等）と平牧層の丘陵上の身隠山古墳群（白山、御獄）に限られる。

古墳時代後半期の集落は市内全域に散見され、群集墳の形成もこれに連動したあり方を示しているものと考えられる。低位段丘面では土田渡古墳群、川合古墳群が著名で、先の川原石積石室墳造営集団の本拠地である。当古墳の所属する広見古墳群や同一丘陵東側の羽崎古墳群、先の大きく5群程度にまとまりをもつ横穴墓の群集は平牧層の丘陵上に位置し、眼下の沖積地を経営基盤としていたものと考えている。いずれの古墳群も群形成の時期は6世紀初頭からで、同時期のものは数が少ない。

## (2) 広見中川寺1号墳・中世墓群の立地

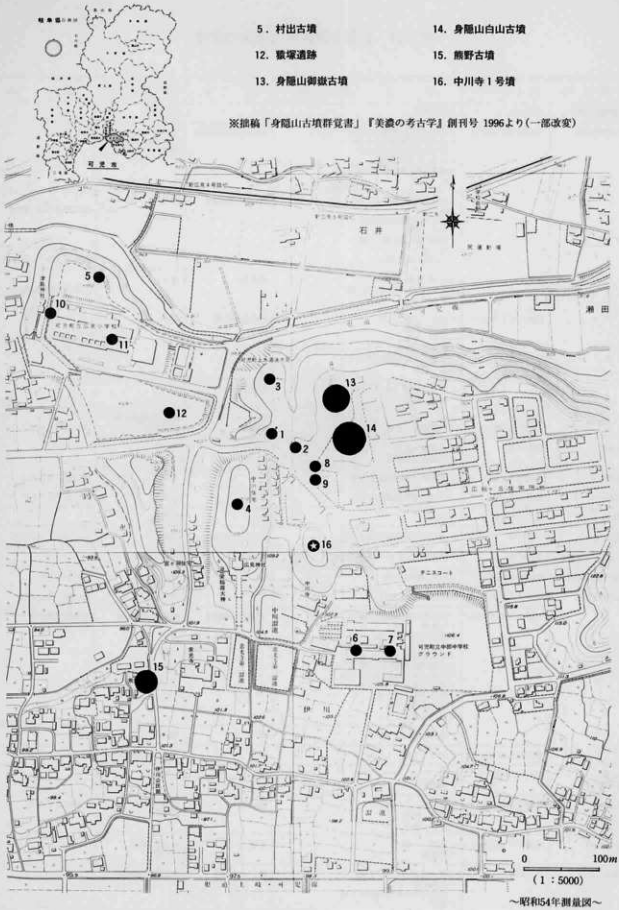
本遺跡群は、久々利地区の山塊から羽崎、広見地区へと東西に続く低丘陵の西端（通称「身隠山丘陵」）付近に立地し、著名な身隠山古墳群も含めて広見古墳群に属するものとして把えられる。羽崎古墳群との関係では、[3] 両者の中間が古い時期の団地造成で分断されており、断言はできないが、本墳を含めて15基が古記録等から復原でき、[4] 別個の群としてよいものと考えている。身隠山白山古墳を初めとして造営される広見古墳群の組成は、後半期へと連綿と続くものとは考えていないが、本墳を後半期群集墳形成の最初期段階のものとして把えることは可能であろう。広見古墳群の分布は第1図に示すが、分布図の9に示される古墳と重複する可能性も否めない。中川寺1号墳の墳端は標高124m付近、中世墓群の標高は122mより下位へと選地している。これは南へ延びる支脈の頂上付近であり、中世墓群については、眼下南西方向に位置する霊東山常光寺の前身の寺との関わりが考えられる。

(註)（1） 長瀬『久々利西山横穴墓』 1994 可児市教育委員会

（2） 長瀬「濃尾地方の川原石積石室」『川合遺跡群』1994 可児市教育委員会

（3） 亀谷・長瀬『羽崎古墳群』 1985 可児市教育委員会

（4） 長瀬「身隠山古墳群覚書」『美濃の考古学』創刊号 1996 美濃の考古学刊行会

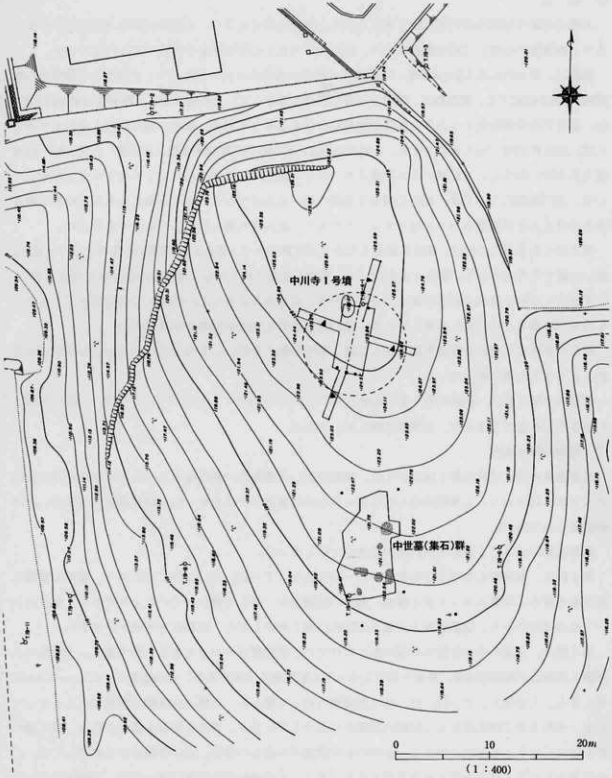



第1図　立地と環境(付近の古墳分布)　～古記録から～

## 第１表　広見古墳群出土遺物の整理

| 古墳名等 | 出土年月日 | 出土遺物 | 文献 | 前・現の所在 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 舟隠山御鎖古墳？ | 天保６年 | 勾玉等数品 | ① | 不明 | |
| 舟隠山御鎖古墳 | 天保９年正月21日 | ・内行花文鏡(仿製)１面(4片・今5片)<br>・勾玉(丁字頭、硬玉)１個<br>・管玉(緑色凝灰岩)35個<br>・小玉(ガラス)76個<br>・石釧(緑色凝灰岩)1-2個(12片)<br>・朱　若干 | ①②③④⑤⑥他 | 中川寺<br>(可児郷土歴史館保管、勾玉除く) | |
| | | ・内行花文鏡(長生宜子銘)１面<br>・鏡　破片１<br>・管玉(緑色凝灰岩)81個<br>・小玉　93個<br>・石釧(緑色凝灰岩)１個<br>・朱　若干<br>・「火酒壺形」土器片 | ①②③④⑤⑥他 | 個人 | 中川寺蔵と同一鏡か<br>遺物が入っていたという |
| | | ・勾玉(瑪瑙)１個<br>・管玉(瑪瑙、六角柱形)１個<br>・管玉 | ⑩⑪⑫ | 個人 | 他の古墳の可能性 |
| | 安政５年８月２日 | ・勾玉　１個<br>・管玉　11個<br>・小玉　９個<br>・刀剣類　５片<br>・土器　２片(文献⑤になし)<br>・朱　若干 | ①②③④⑤他 | 個人 | 文献⑤では、出土地点不明 |
| | | ・管玉　５個<br>・直刀　断片 | ⑩⑫ | 個人 | |
| | 明治４年<br>(年月日不詳) | ・鏡　１面<br>・四獣形鏡　１面 | ①<br>⑩⑪他 | 個人(可児郷土歴史館保管) | 同一のものと考えられる。 |
| (分布図の１) | 明治７年 | ・刀剣類　数片<br>・須恵器(提瓶他) | ①② | 不明 | |
| (分布図の２) | 明治９年以前 | ・須恵器(平瓶他)破片多数 | ① | 不明 | 樋口藤三郎氏付図 |
| (分布図の３) | 明治９年以前 | ・「古剣、甕等許掘出セリ」 | ① | 不明 | 樋口藤三郎氏付図 |
| (分布図の４) | 明治９年以前 | ・管玉 | ① | 不明 | |
| (分布図の11) | 明治19年 | ・内行花文鏡(仿製六弧)１面 | ①⑬、中井1994 | 不明 | 分布図の３可能性少 |
| 舟隠山白山古墳付近 | 明治31年 | ・須恵器(高杯、直口壺他)数個 | ⑩⑫ | 個人 | |
| 舟隠山白山古墳付近 | 明治35年以前 | ・勾玉(瑪瑙)１個 | ④ | 東京大学 | 「白山社山脚」 |
| 舟隠山白山古墳 | 明治９年以前 | ・「古剣掘出セリ」 | ① | 不明 | 樋口藤三郎氏付図 |
| | 明治35年９月23日 | ・内行花文鏡(仿製)１面<br>・だ龍篇　１面<br>・鍬形石(碧玉)４個<br>・車輪石(碧玉)１個<br>・石製模造剣(碧玉)１本<br>・石製腕飾車(碧玉)１個<br>・三輪玉様石製品(碧玉)１個<br>・筒形石製品(碧玉)１個<br>・直刀(剣)５(数)本<br>・巴形銅器　２個<br>・朱　70又以上 | ①②③④⑤⑥他 | 東京国立博物館 | 可児郷土歴史館レプリカ製作(直刀除く) |
| | | ・車輪石(碧玉)１片 | ⑭ | 個人 | |
| | 明治35年10月31日 | ・鉄斧　２個 | ④ | 東京国立博物館 | 柴田氏の再調査 |
| 村出古墳<br>(分布図の５) | (年月日不詳) | ・鏡<br>・須恵器 | ⑩ | 不明 | |
| (分布図の８) | 昭和６年５月23日 | ・直刀(大・小)各数本<br>・鉄鉾　数本<br>・鉄鏃　数本 | ⑩⑪⑫ | 広見小学校<br>(不明) | 文献⑪に写真有 |
| (分布図の９) | 昭和６年５月24日 | ・銀環　１個<br>・須恵器 | ⑩⑫ | 広見小学校<br>(不明) | |
| 猿塚遺跡(12) | 昭和46年３月 | ・管玉(緑色凝灰岩)２個<br>・骨製髪飾　１本<br>・弥生中期土器(大地式)１個<br>・骨片 | ⑪、中島1975 | 可児郷土歴史館 | |

(抜萃『舟隠山古墳群'覚書』『美濃の考古学』別刊号　1996より)
※文献欄の文献明細は省略




**第2図　現況測量図**

# Ⅲ. 中川寺1号墳

## (1) 石　室

本墳の埋葬主体部は横穴式石室と考えられる。天井石はもとより、各壁の石材の遺存状況は不良であり、西側壁の石積1－2段の遺存により、かろうじて凡その平面法量が測定できる程度である。

奥壁は、部分的に高さ30cm程度、3段積みの遺存が検出されたのみに止り、西側壁との関係から奥壁幅1.0mを推定する。東側壁は、奥壁との接合部分が残存していたに過ぎない。西側壁の遺存は約3.5m、基底石の平面配置からみると玄室は胴張りを有するようである。礫床の残存状況も合わせて考えれば、玄室長は約3.7mと推定できる。各壁の石材は、地山の凝灰質砂泥岩層（平牧層）を深さ30－50cm隅丸長方形に掘り込んだ墓壙の中に設置されており、裏込めには地山のブロックを含んだ土を用いている。玄門部側については、地形の関係上墓壙の掘り込みはなかったものと考えられる。石材の岩質はそのほとんどが礫床石材も含めてチャートであり、板石状に割られたようなものも目立つ。

第3図にみる※印の石は、礫床に密着しており元位置を保つと思われ、閉塞石の残存もしくは框石、或いは棺台と考えられる。框石であれば、ここまでが玄室で約3.25m、竪穴系の石室の可能性もある。いずれにしても小規模な石室であることは確かで、石材の大きさもこの時期、この地域の「小さめのものを小口積み」の公式に合致している。玄門部も含めて羨道の有無も不明である。

礫床の石材は、地山の岩盤を掘り込んだ後、若干の敷土を行い、その上にレベルを揃える形で面を広くとるように密に敷いている。

玄室の主軸方位は、縦断面A－A′とは少しズレるが、N-14°30′－Eを示し、玄門寄りの最も胴張った部分でこれを折り返せば、玄室最大幅1.35mとなる。

## (2) 遺物の出土状況

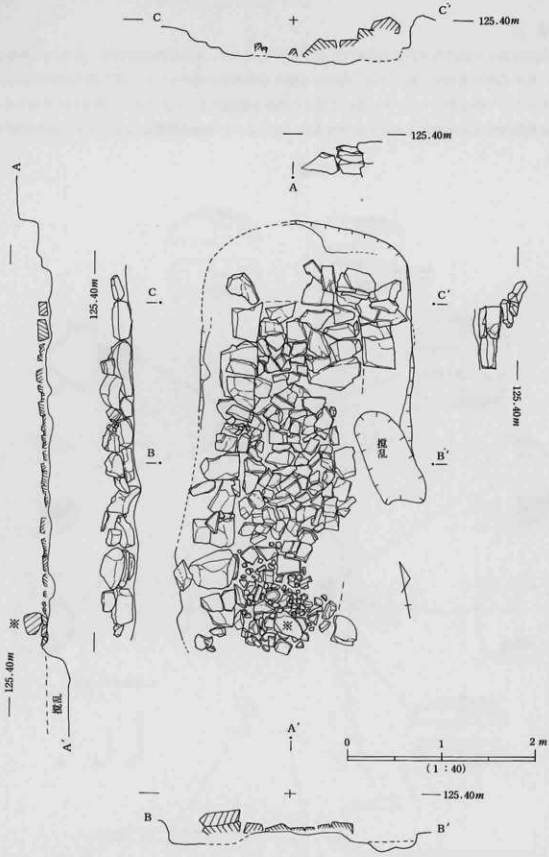
副葬遺物の出土状況を第4図に示した。奥壁に近い須恵器の一群のほとんどは、古墳発見時に既にとり上げられており、工事関係者の話を基に凡その位置を示すに止まった。副葬遺物の全ては、ほぼ礫床面とみて良い。

副葬遺物は大きく2群に分かれた出土状況を示している。

第1群は、発見時に取り上げられていた一群である。3～10、13、14がこれに当り、奥壁の東隅に短頸壺を置き、坏類3セット分と提瓶，蓋付の短頸壺が一括して置かれていたようである。焼成においては共通性があり、短頸壺類と提瓶が黒灰色に固く焼けしまり、坏類はやや焼きがあまい。

第2群は、玄室の中央付近から開口部に向けての、西側壁寄りにまとまる一群である。土師器の小型甕と須恵器の蓋付短頸壺、坏蓋・身の1セットに鉄器類と玉類を含む。その範囲は、1.7m×0.9mにまとまる。土器類1、2、11、12、15は西側壁に添って置かれ、玉類はほぼ開口部寄りにまとまっている。玉類も全て礫床面もしくは礫の間隙から出土しているが、管玉を含む4個の小群は、第3図中の※印の石の下からの出土である。※印の石を閉塞石か框石の残存、或いは棺台かと推定したが、この状況からみると棺台と考えた方が良さそうである。刀子16は切先を開口部へ向け、東側壁に添って出土した。この群の須恵器は、第1群とは逆に坏類が固く焼けしまり、短頸壺類の焼きがあまい。

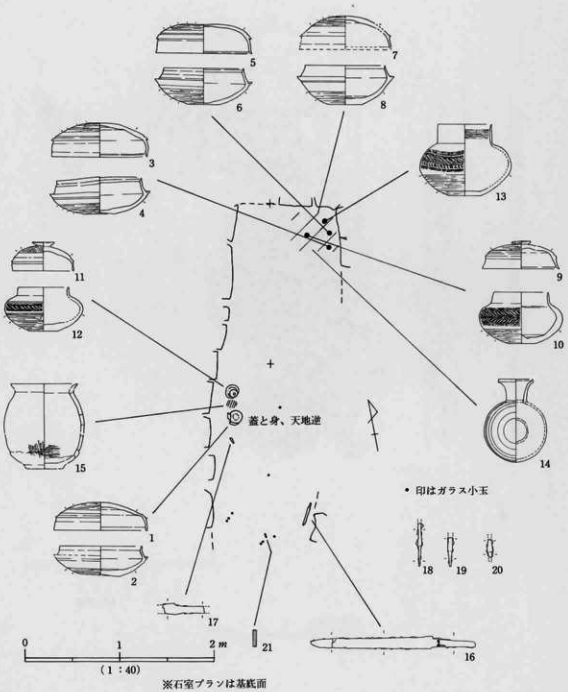
これらの2つの群は、2回の埋葬を少なからず反映しているものと考えられる。


C
C'
125.40m
125.40m
A
A
125.40m
C
C'
B
B'
125.40m
125.40m
※
※
撹乱
撹乱
A'
A'
0
1
2 m
(1 : 40)
125.40m
B
B'

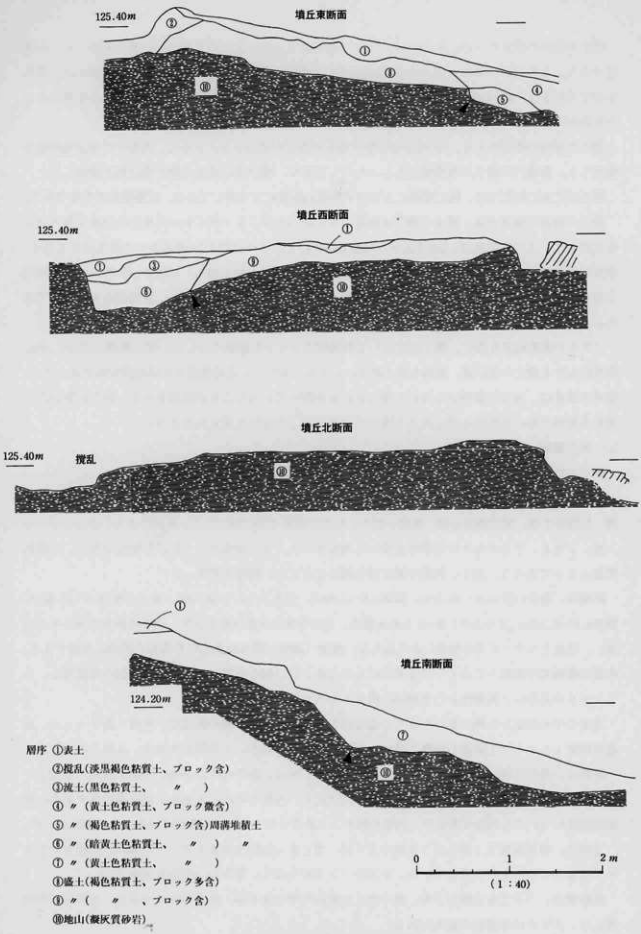
第3図　石室実測図

### (4) 墳　丘

発見時以前から既に天井石も失われていた状況下にあって、盛土や外表施設等、得られた情報は少ない。特に石室の北部分においては、地山の岩盤に至る削平を受けていた。第5図に墳丘断面を示すが、かろうじて西と東のトレンチにおいて盛土の残存を確認することができた。発見時の写真からも、墳丘の残影をかすかに読みとることもできるが、各トレンチの断面観察からは以下のとおり判断できよう。




第4図　副葬遺物出土状況


125.40m
墳丘東断面
125.40m
墳丘西断面
125.40m
撹乱
墳丘北断面
墳丘南断面
124.20m
層序 ①表土
②撹乱(淡黒褐色粘質土、ブロック含)
③流土(黒色粘質土、 〃 )
④ 〃 (黄土色粘質土、ブロック微含)
⑤ 〃 (褐色粘質土、ブロック含)周溝堆積土
⑥ 〃 (暗黄土色粘質土、 〃 ) 〃
⑦ 〃 (黄土色粘質土、 〃 )
⑧盛土(褐色粘質土、ブロック多含)
⑨ 〃 ( 〃 、ブロック含)
⑩地山(凝灰質砂岩)
0
1
2m
(1:40)

第5図　墳丘断面図

墳丘の東側の断面からは、厚さ約20～40cmの残留盛土と削り出しによる地山岩盤の整形ラインを確認できた。この両者の関係と流土の堆積状況から、墳端の位置を◀印で示す。層序④の盛土は、褐色を呈する粘質土に地山岩盤のブロックを多く含むものである。墳丘裾部には、浅い周溝とも思えるような地山ラインをみる。

墳丘の西側の断面からも、厚さ25cm程度の盛土の遺存を確認するとともに、周溝状の地山整形痕を検出した。周溝内の覆土の堆積状況もしっかりしており、層序④の盛土の裾を墳端部と確認した。

墳丘の北側の断面では、既に重機による削平が地山岩盤にまで達しており、土層観察は不能である。

墳丘の南側の断面では、盛土の遺存は確認できなかったが、２ヶ所において地山の急激な落ち込みを把握した。１つは標高124.2m付近からの落ち込み、もう１つは123.7m付近からの落ち込みである。東西の地山整形ラインとの兼ね合いから、前者が墳端を示すものと把え、法尻の123.75m地点を墳端と考える。とすれば、◀印の墳端から外方へ約１m幅のテラス状の平坦面も、意図的なものとして考えることができよう。

これらの観察結果を基に、第２図において墳端推定ラインを破線で示した。墳丘規模は直径11.0m、現況における墳丘の遺存は、南側で高さ約２mとなる。少なくとも西側部分には周溝を有するようで、墳丘の築造は、地山の整形をしながら得られた土を盛っていったことが推測される。但し石室前面に当たる南側では、主に削り出しによる墳丘の築造であったものと考えられよう。

**(4) 出土遺物**

図示した古墳に関する遺物は、全て玄室内から出土した副葬遺物である。

奥壁に近い東の角部から取り上げられた一括遺物をＡ群とする。Ａ群の組成は、坏蓋３個、坏身３個、短頸壺２個、短頸壺蓋１個、提瓶１個の、合計10個体の須恵器である。坏類のうち、３と４がセット品、５と６、７と８もその可能性が高いと考えている。９と10もセット品の可能性が高く、有蓋短頸壺となるであろう。以下、詳細は第２表に譲ることとし、概略を記す。

坏類は、蓋の口径14.6～15.2cm、器高4.6～5.4cm、立ち上り2.1～2.7cm、身の口径12.7～13.0cm、器高5.6～6.1cm、立ち上り1.9～2.1cmを測り、ほぼ均質な法量分布を示す。全て尾張系の品と考えて良い。法量とヘラケズリの度合いからみれば、猿投（斎藤）編年の東山61号窯期の新相に合致するが、内面口縁端部の面取りにシャープさが欠ける点には、(十)期の要素もみてとれる。他の須恵器も、ヘラケズリの具合いと装飾性から当該期に属するものと考えてよい。

玄室の中央付近から開口部に向けての遺物群をＢ群とする。Ｂ群の組成は、坏身・蓋１セット、有蓋短頸壺１セット、土師器小型甕１個に、玉類と鉄器類を伴う。土器類の内容は、Ａ群とよく似る。

坏類は、蓋の口径14.6cm、器高4.4cm、立ち上り2.0cm、身の口径12.8cm、器高4.6cm、立ち上り1.5cmを測り、ヘラケズリの具合いや面取りの状況も、Ａ群のそれと大差ない尾張系の品である。有蓋短頸壺についても同様であるが、両品の焼き上り具合いについては対象的であることを前に述べた。

玉類は、碧玉製管玉１個とガラス製小玉９個。まとまった出土状況を示し、埋葬時の位置を少なからず反映しているものと考えている。小玉はリンゴ形を呈し、型作りの反映と推察する。

鉄器類は、刀子２本と鏃が３本。鏃の出土位置は不明であるが、長茎のものである。16の刀子の柄部には、かすかに木質痕が認められる。

## 第2表　中川寺1号墳　遺物観察表

（単位cm）

| 遺物番号 | 出土位置 | 遺物名称 | 法量 口径 | 器高 | 立ち上り | その他 | 成・整形、調整 | 色調 | 焼成 | 図化部残存率% | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 玄室 | 須ー坏蓋 | 14.6 | 4.4 | 2.0 | | 左回転ロクロのヘラケズリ | 灰 | 良良 | 100 | 2とセット |
| 2 | 〃 | 〃ー坏身 | 12.8 | 4.6 | 1.5 | | 〃 | 〃 | 〃 | 90 | 1とセット、ヘラ記号？ |
| 3 | 〃 | 〃ー坏蓋 | 15.0 | 5.4 | 2.7 | | 左右両回転ロクロのヘラケズリ | 濃灰 | 良 | 100 | 4とセット、胎土縞、ゆがみ |
| 4 | 〃 | 〃ー坏身 | 13.0 | 5.6 | 2.1 | | 左回転ロクロのヘラケズリ | 〃 | 〃 | 100 | 3とセット、〃、〃 |
| 5 | 〃 | 〃ー坏蓋 | 復15.2 | 4.6 | 2.2 | | 左右両回転ロクロのヘラケズリ | 〃 | 〃 | 30 | 6とセットか、〃　反転復元 |
| 6 | 〃 | 〃ー坏身 | 12.8 | 5.6 | 1.9 | | 〃 | 〃 | 〃 | 90 | 5とセットか、〃 |
| 7 | 〃 | 〃ー坏蓋 | 推14.6 | 推5.3 | 推2.1 | | 左回転ロクロのヘラケズリ | 〃 | 〃 | 60 | 8とセットか |
| 8 | 〃 | 〃ー坏身 | 復12.7 | 6.1 | 1.9 | | 〃 | 淡黄 | 不良 | 60 | 7とセットか、反転復元 |
| 9 | 〃 | 〃ー蓋 | 復12.2 | 4.4 | | つまみ径 3.2 | 外頂部ヘラケズリ | 濃灰 | 良良 | 50 | 10とセットか、〃 |
| 10 | 〃 | 〃ー短頸壺 | 8.6 | 8.1 | | 胴径 13.2 | 外底部・右回転ロクロのヘラケズリ | 〃 | 〃 | 90 | 9とセットか、ヘラ記号？ |
| 11 | 〃 | 〃ー蓋 | 9.8 | 4.5 | | つまみ径 3.5 | 外頂部・〃 | 灰 | 良 | 90 | 12とセット |
| 12 | 〃 | 〃ー短頸壺 | 8.0 | 6.9 | | 胴径 12.3 | 外底部・左回転ロクロのヘラケズリ | 〃 | 〃 | 100 | 11とセット |
| 13 | 〃 | 〃ー〃 | 8.5 | 11.3 | | 〃 14.4 | 〃・右回転　〃 | 黒灰 | 良良 | 100 | 器片熔着 |
| 14 | 〃 | 〃ー提瓶 | 5.4 | 13.2 | | 〃 10.0 | 刺突文、櫛波状文 | 〃 | 〃 | 90 | |
| 15 | 〃 | 土師ー小壺 | 推10.7 | 推13.5 | | 底径推 6.0 | 外ハケ目・内ハケナデ | 黄褐 | 不良 | 30 | 器面磨耗、黒斑 |
| 16 | 〃 | 鉄ー刀子 | | | | 全長 刃長 25.8 18.9 | | | | 100 | 木質痕（柄部） |
| 17 | 〃 | 〃ー〃 | | | | 現存長 6.6 | | | | | |
| 18 | 〃 | 〃ー鏃 | | | | 柄長 3.2 | | | | | |
| 19 | 〃 | 〃ー〃 | | | | 〃 2.4 | | | | | |
| 20 | 〃 | 〃ー〃 | | | | 現存長 2.8 | | | | | |
| 21 | 〃 | 管玉 | | | | 長1.8 径0.42 | 一方穿孔（孔径0.9～0.19） | 淡緑 | | 100 | 碧玉 |
| 22 | 〃 | ガラス小玉 | | | | 長0.37 径0.54 | 整作、孔径 0.08 | 紺 | | 100 | リンゴ形 |
| 23 | 〃 | 〃 | | | | 0.43、0.56 | 〃、〃 0.09 | 〃 | | 100 | 〃 |
| 24 | 〃 | 〃 | | | | 0.40、0.54 | 〃、〃 0.10 | 〃 | | 100 | 〃 |
| 25 | 〃 | 〃 | | | | 0.44、0.60 | 〃、〃 0.12 | 〃 | | 100 | 〃 |
| 26 | 〃 | 〃 | | | | 0.41、0.55 | 〃、〃 0.10 | 〃 | | 100 | 〃 |
| 27 | 〃 | 〃 | | | | 0.40、0.55 | 〃、〃 0.09 | 〃 | | 100 | 〃 |
| 28 | 〃 | 〃 | | | | 0.42、0.55 | 〃、〃 0.11 | 〃 | | 100 | 〃 |
| 29 | 〃 | 〃 | | | | 0.45、0.58 | 〃、〃 0.12 | 〃 | | 100 | 〃 |

※他に図化不能の須恵器甕片1個体とガラス小玉片1個分がある。

# Ⅳ．中川寺中世墓群

## (1) はじめに

中川寺１号墳の尾根の南下方約20m付近、標高122m以下の地点において、重機が軽く表土を削った部分では、古墳発見と同時に拳大の円礫（川原石）群が観察された。当然人為的に運ばれたものであることを確認するとともに、中世陶器類の細片の散布もみられ、中世墓の存在を予測した。

開発に係る部分に調査区を設定するとともに（第２図）、表土を剝いだ段階では、No.１～９の９群の集石遺構を検出したが、No.１・４・８は撹乱によるものとの判断がなされ、６群の集石遺構の中世墓と結論づけた。尚、表面観察からは、開発が及ばない調査区の下方にも、所々に川原石が顔をのぞかせており、遺跡は更に広がりをみせるものと考えられる。

浅い土壙を掘り（或いは掘らず）、蔵骨器を安置し、その上に川原石を敷き（或いは積み、盛り）、五輪塔等を設置する中世の墓は、この地域でよく見受けられる火葬埋葬の形態であり、その平面形は方形であったり円形であったりする。市内においては、川合次郎兵衛塚１号墳墳丘上や今渡遺跡、徳野遺跡Ａ地点、長塚古墳墳丘上、下恵土清水経塚遺跡、欠ノ上遺跡等（各発掘調査報告書による）で検出されている。

## (2) 遺構と遺物

集石群の検出状況と遺物の出土状況を第６図に、遺物の実測図を第８図に、遺物の集計表と観察表を第３・４表に示すので、各集石（中世墓）の概略のみを記す。尚、どの墓も上部は欠失していると考えられ、五輪塔等もその一部すら出土していない。図示した部位においてもある程度の撹乱は否めない。また集積下では、しっかりした土壙プランもつかめなかった。集石の下はすぐ地山である。

・Ｎｏ．２

1.0×0.8mの範囲で、拳大の円礫群がよくまとまっている。出土した山茶碗小皿(31.32)は、美濃山茶碗編年（以下編年）の大洞東１号窯期（15世紀前半）を示す。

・Ｎｏ．３

人頭大の川原石を含む３個の石を残すのみである。33～37の遺物もNo.２と同時期を示す。

・Ｎｏ．５

人頭大の川原石が目立ち、ほぼ0.8×1.2mの範囲に残存している。30は古瀬戸中期の四耳壺、38と39は編年大洞東１号窯期、40は白土原１号窯期、41は明和１号窯期に属する山茶碗であるが、撹乱状況も含めて考えると大洞東１号窯期を採るのが妥当と思われる。

・Ｎｏ．６

拳大の川原石数個を遺存するのみである。古瀬戸の水注片が出土している。

・Ｎｏ．７

0.9×1.3mの範囲に集中する。伴出遺物はない。

・Ｎｏ．９

0.9×1.6mの範囲に集中する。集石中ではないが、近くから42.44（大洞東１号窯期）と43（明和１～大畑大洞４号窯期）の山茶碗類が出土している。

時期を特定できない墓もあり、原位置を保つ蔵骨器も検出できなかったが、発掘区から出土した古瀬戸類や在地産の山茶碗類の様相は、鎌倉時代前半期～室町時代前半期を示し、概して室町時代前半期（編年大洞東１号窯期）に所属時期を求め得るものが多い。

・参考文献　多治見市教育委員会『小名田小滝古窯跡群』 1993

## 第３表　中川寺中世墓群遺物集計表

（個体数）

| 墓（集石）番号 | 山茶碗 | | 古瀬戸 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 碗 | 小皿 | 四耳壺 | 瓶子 | 水注 | 擂鉢 | 他 |
| Ｎｏ．２ | 1 | 4 | 2 | | | | 1 |
| Ｎｏ．２・３ | 6 | 5 | 1 | | 1（1） | 1 | 1 |
| Ｎｏ．５ | 4 | | 1（1） | | | | |
| Ｎｏ．６ | | | | 1（1） | 1 | | |
| Ｎｏ．９ | 2 | 1 | | | 1（1） | | |
| 区内 | 2 | 2 | 2（1） | 1（1） | | | 1 |
| 推計 | 15 | 12 | 5 | 1 | 2 | 1 | 3 |

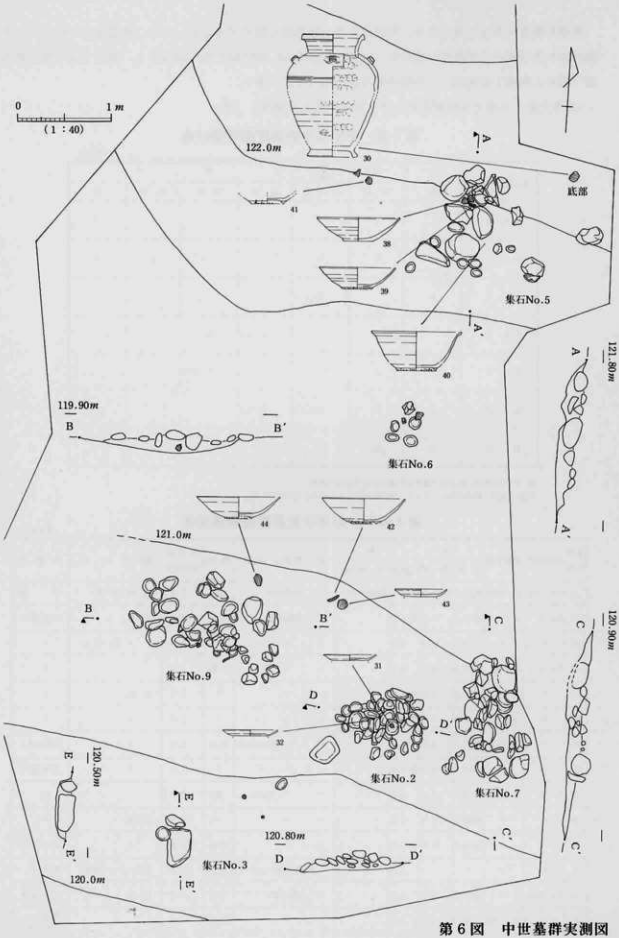
※（）内数値は、他と同一個体の可能性のあるものの内数。
※墓（集石）番号のＮｏ．１・４・８は攪乱によるもののため欠番とした。

## 第４表　中川寺中世墓群遺物観察表

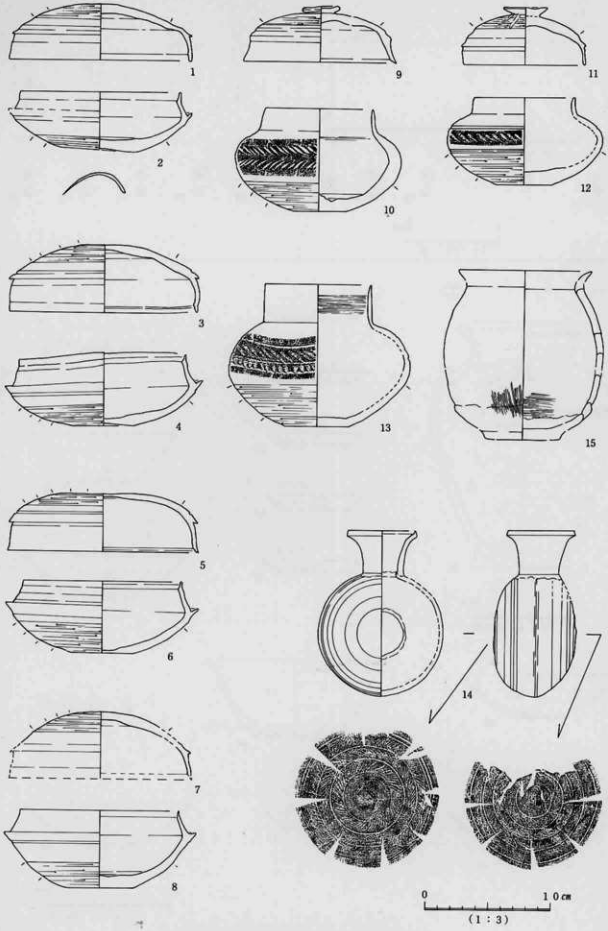
（単位ｃｍ）

| 遺物番号 | 墓(集石)番号 | 遺物名称 | 法量 口径 | 器高 | 底部径 | その他 | 皮・整形、調整 | 焼成 | 図化部残存率% | 特記事項 | 窯期等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 30 | No．5付近 | 古-四耳壺 | 推12.4 | 推26.0 | 復10.5 | 頸径復10.5 | ロクロ、内面指圧痕 | 良 | ２０ | 施釉剥落 | 中期 |
| 31 | No．2 | 山－小皿 | 推 8.4 | 0.9 | 推 5.6 | | 〃、回転糸切痕 | 良良 | ２０ | 反転 | 大洞東１ |
| 32 | 〃 | 〃 | 8.7 | 0.9 | 5.2 | | 〃、〃 | 〃 | ９０ | 〃ゆがみ | 〃 |
| 33 | No．2．3 | 山－碗 | 12.5 | 3.6 | 4.1 | | 〃、〃 | 不良 | １００ | | 〃 |
| 34 | 〃 | 〃 | 推11.9 | 3.9 | 推 4.0 | | 〃、〃 | 〃 | ２０ | 反転 | 〃 |
| 35 | 〃 | 山－小皿 | 推 7.6 | 1.1 | 推 4.8 | | 〃、〃 | 〃 | ２０ | 〃 | 〃 |
| 36 | 〃 | 〃 | 推 7.6 | 1.2 | 5.3 | | 〃、〃、内底スリケシ痕 | 良良 | ３０ | 〃 | 大畑大洞４ |
| 37 | 〃 | 〃 | 復 8.4 | 0.9 | 復 5.4 | | 〃、〃 | 〃 | ４０ | 〃 | 大洞東１ |
| 38 | No．5 | 山－碗 | 13.3 | 3.7 | 4.7 | | 〃、〃、無高台 | 良 | ７０ | | 〃 |
| 39 | 〃 | 〃 | 復12.2 | 3.4 | 4.6 | | 〃、〃 | 〃 | ３０ | 反転 | 〃 |
| 40 | 〃 | 〃 | 復14.4 | 6.0 | 6.3 | | 〃、〃 | 不良 | ５０ | 〃 | 白土原１ |
| 41 | 〃 | 〃 | | | 5.0 | | 〃、回転糸切痕回転ヘラオコシ | 良良 | ４０ | 内底スリケシ、外底板目 | 明和１ |
| 42 | No．9付近 | 〃 | 復13.3 | 3.9 | 4.0 | | 〃、回転糸切痕 | 不良 | ４０ | 反転 | 大洞東１ |
| 43 | 〃 | 山－小皿 | 8.3 | 1.2 | 5.0 | | 〃、〃 | 良良 | ７０ | | 明和～大畑大洞４ |
| 44 | 〃 | 山－碗 | 復13.2 | 3.4 | 復 4.1 | | 〃、〃 | 〃 | ４０ | 反転 | 大洞東１ |

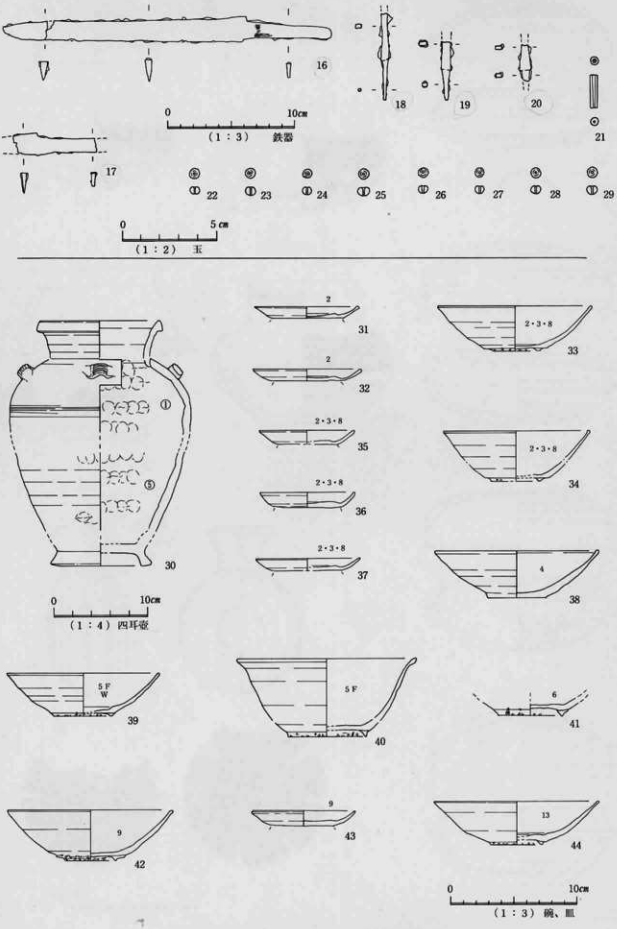
※「古」は古瀬戸、「山」は山茶碗を示す。


0
1 m
(1 : 40)
122.0m
A
A'
30
底部
41
38
39
集石No.5
40
121.80m
119.90m
B
B'
集石No.6
44
42
121.0m
43
C
C'
120.90m
集石No.9
31
D
D'
32
集石No.2
集石No.7
E
E'
120.50m
120.80m
集石No.3
120.0m

第６図　中世墓群実測図




第7図　中川寺1号墳遺物




第8図　中川寺1号墳・中世墓群遺物

# V．ま　と　め

### (1) 中川寺1号墳の遺物

第12図には、市内川合古墳群及び市内出土の須恵器坏身・蓋についての法量の分析結果を、『川合遺跡群』の報告書より転載した。これらの資料は、東山44号窯期（H-44）までの時期に限れば、羽崎大洞3号墳の1点を除き、ことごとく尾張系の坏ばかりである。当可児地域における須恵器組成の特徴の一つには、まずこの点が指摘できよう。尚、本墳においても例外ではなかった。

この法量分布図に、本墳のA、B両群出土の坏を当てはめてみれば、東山61号窯期（H-61）の分布域内に全てが収まり、この窯期の新相段階（TK-10古併行期）とみてよいものと考えられる。

副葬遺物の組成は、市内同時期の瀬田神崎山古墳や羽崎大洞3号墳との比較が可能である。共通点としては、管玉や小玉の装飾品が納められること、須恵器は坏が主体を成し、必ず短頸壺が特徴ある位置に配されること、坏類以外は黒色系によく焼けしまったものが多いこと、などが指摘できよう。

### (2) 中川寺1号墳の墳丘と石室

A群とB群の副葬遺物の出土状況から、2回の埋葬を考えている。これは、須恵器の型式差には表われない時間差であると思われ、まだ玄室の奥に棺の形が残る時点で玄室手前のB群の位置に追葬が行なわれたものと考えている。玉類の位置から、頭位は南方向と考えてよいものなのか。

本墳は直径11mの小規模な円墳と考えられ、広見古墳群における後期群集墳の形成初段階に位置づけ得る。瀬田神崎山古墳や羽崎大洞3号墳も、それぞれの群の中で同様の位置づけをしているが、その立地（占地、選地）は当然丘陵尾根上の最も目立つ場所を占めることになる。石室規模は、奥壁部で幅1.0m、最も胴張った部分で推定1.35m、玄室長推定3.7m以上（4m程度）を測り、羨道に関する情報はない。墳端からみても、羨道部が存在したとしてもごく短いものであったには違いない。おそらく、羽崎大洞3号墳のようなものであったのだろう。竪穴系の石室であったことも想像できる。

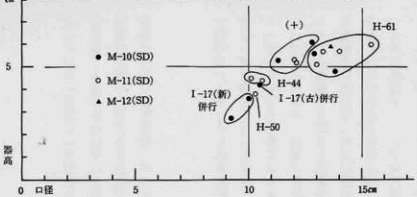
この時期の石室に見られる特徴は、石材が比較的小さいことにある。主に石材の短辺を内に向けた小口積みの技法を採っている。また、玄室の平面形は、先の市内の2古墳に加え、多治見市の虎渓山1号墳においても長方形プランを呈するが、同時期の本墳において、当地域では初めて胴張りプランを確認した。市外では、川原石積石室である関市の陽徳寺裏山1・4号墳も胴張りを有している。

後期群集墳形成の初段階に当るH-61(或いはH-11)期の古墳は、それぞれの群の中においては1～2基に限られる。爆発的な造営がなされるのはH-44に入ってからで、結果的に10～50基程度の群が形成されている。これらを考え合わせれば、本墳も当然、広見古墳群造営集団の中にあって当該期に特別なポジションを占めていた被葬者像を考えなければならない。

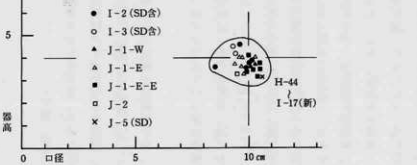
### (3) 中川寺中世墓群

今回確認できたのは6基に止るが、本中世墓群は更に広がりを有している。造墓時期の中心は室町時代前半（大洞東1号窯期）にあるようだ。尾根の南方眼下に所在する仏眼山中川寺は、万治2(1659)年の創建で中川氏の菩提寺であるが、南西方向に所在する霊東山常光寺は、元応年中(1319～1321)や大永年中（1521～1528）の火災が寺伝にある。年代的には本中世墓群と常光寺との関連も気にかかるところである。(『可児町史』通史編 1980　参考)

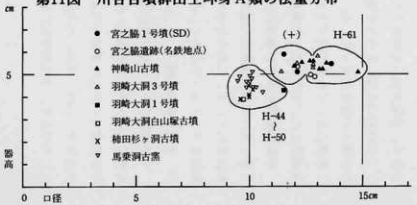
## 第９図　川合古墳群出土坏身Ａ類の法量分布(1)




## 第10図　川合古墳群出土坏身Ａ類の法量分布(2)




## 第11図　川合古墳群出土坏身Ａ類の法量分布




## 第12図　川合古墳群出土坏身Ａ類の法量変化

○ 坏蓋　● 坏身　(単位：cm)

| 窯期 | 法量 / 資料 | 口径 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 器高 3 | 4 | 5 | 立ち上り 1 | 2 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H-61 | M-11 (45/44) | | | | | | | ○ | ● | | | ○ ● | ○ | ● |
| | M-12 (170/171) | | | | | | ● | ○ | | | | ○ ● | ● | ○ |
| | M-10 (3/4) | | | | | ● | ○ | | | | | ○ ● | ● | ○ |
| (+) | M-11 (56/48) | | | | ● | ○ | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| | M-11 (55/49) | | | | ● | ○ | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| H-44 | M-11 (58/51) | | | ● | ○ | | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| | I-2 (331/332) | | ● | | ○ | | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| | I-3 (359/360) | ● | | | ○ | | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| H-50 | J-1-E (476/477) | ● | | | ○ | | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| | J-1-E (478/479) | | ● | ○ | | | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| | J-1-E (480/481) | ● | ○ | | | | | | | | ○ | ● | ● | ○ |
| I-17古 那加5(古) | J-1-E-E (528/529) | | ● | | ○ | | | | | | ○ | ● | ● | |
| | J-1-E-E (526/527) | | ● | ○ | | | | | | | ○ | ● | ● | |
| | J-1-E-E (530/531) | | ● | ○ | | | | | | | ○ | ● | ● | |
| | J-1-E-E 538 | | ○ | | | | | | | | ○ | | | ○ |
| (I-17新) 那加5(新) | J-5 601 | | | ● | | | | | | | ● | | ● | |
| | J-2 559 | | ● | | | | | | | | ● | | ● | |
| | M-10 13 | ● | | | | | | | | ● | | | ● | |

◦(例)M-11：宮之脇11号墳，I-2：稲荷塚２号墳，J-1-E-E：次郎兵衛塚１号墳東副室東側

◦資料番号は遺物番号同じ。(　)はセット品

◦表の様式は、関市教委『塚原遺跡・塚原古墳群』1989を参考にした。

図版１　中川寺１号墳（１）

発見時の墳丘

石室（南から）

石室（北から）

（１と２）　　（11と12）

（16）

遺物の出土状況

図版2　中川寺1号墳(2)

東側壁の遺存

礫　床

奥壁の遺存と掘方

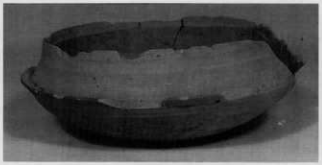
図版3　中川寺1号墳(3)

1

3

2

4



6

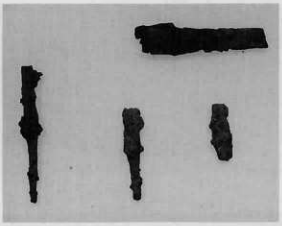
9と10

11と12

13

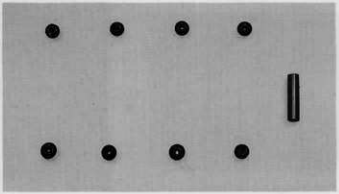
図版4　中川寺1号墳(4)・中世墓群(1)

14



17～20

16



玉類 21～29

中川寺中世墓群全景

図版5　中川寺中世墓群（2）

墓　No. 5

墓　No. 6

墓　No. 7とNo. 2

墓　No. 3

墓　No. 9

図版6　中川寺中世墓群(3)

33

32

同上　33

43

38

# 可児市埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

| | | |
|---|---|---|
| 可児市埋文調査報告 | 1 | 『下切窯ヶ皿（姫下切）古窯試掘調査報告書』 1971 |
| 〃 | 2 | 『北裏遺跡』 国道41号線名濃バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告書 1973 |
| 〃 | 3 | 『可児町杉ヶ洞古墳発掘調査報告書』 1973 |
| 〃 | 4 | 『谷迫間古窯址発掘調査報告書』 1974 |
| 〃 | 5 | 『可児町柿下古窯発掘調査報告書』 1974 |
| 〃 | 6 | 『宮之脇遺跡発掘調査報告書』 1976 |
| 〃 | 7 | 『神崎山古墳発掘調査報告書』 1976 |
| 〃 | 8 | 『可児町粘り塚古墳発掘調査報告書』 1977 |
| 〃 | 9 | 『可児町谷迫間２号古窯発掘調査報告書』 1978 |
| 〃 | 10 | 『川合遺跡発掘調査報告書』 1978 |
| 〃 | 11 | 『欠ノ上遺跡発掘調査報告書』 1979 |
| 〃 | 12 | 「瀬田北ヶ洞古墳発掘調査報告書」『可児市の文化財』第５集 1984 |
| 〃 | 13 | 『土田東山古墳発掘調査報告書』 1984 |
| 〃 | 14 | 『羽崎古墳群』 羽崎ニュータウン造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1985 |
| 〃 | 15 | 『大森奥山古窯跡群』 桜ヶ丘ハイツ宅地造成第４次工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1985 |
| 〃 | 16 | 『下切兎田古窯』 下切工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1985 |
| 〃 | 17 | 『久々利奥磯山４号窯』 富士カントリー美濃コース造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1988 |
| 〃 | 18 | 『金屋遺跡』 大清水土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1989 |
| 〃 | 19 | 『熊野古墳』 市道3107号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財範囲確認調査報告書 1989 |
| 〃 | 20 | 『土田八幡4号墳・袖裏遺跡発掘調査報告書』 1990 |
| 〃 | 21 | 『川合遺跡群』 川合北部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書 1994 |
| 〃 | 22 | 『下切香ヶ洞古窯』 姫治地区南部開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書 1994 |
| 〃 | 23 | 『矢戸上野２・３号窯』宅地開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書 1994 |
| 〃 | 24 | 『久々利西山横穴墓』 花フェスタ`95関係造成工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書 1994 |
| 〃 | 25 | 『徳野遺跡（Ｂ地点)』宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1996 |
| 〃 | 26 | 『国指定史跡　長塚古墳　発掘調査概要報告書』 1997 |
| 〃 | 27 | 『徳野遺跡（Ａ地点)』 徳野土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書 1998 |
| 〃 | 28 | 『広見中川寺１号墳・中世墓群』 歴史と文化の森公園造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書 1998 |

『広見中川寺１号墳・中世墓群』
発　　行　　平成10年12月21日
可児市教育委員会
岐阜県可児市広見1-1
印刷会社　　可児電子印刷
岐阜県可児市今渡1619－178